

あとがき

今年には5月26日に宮城県沖の地震(M7.0)、7月26日に宮城県北部の地震(M6.2)、さらに9月26日には平成15年(2003年)十勝沖地震(M8.0)と、北日本で立て続けに被害地震が発生しました。活断層研究センターでは、7月の宮城県北部の地震と9月の2003年十勝沖地震については、地震後直ちに緊急調査を実施しました。緊急調査の成果は、本報告に盛り込むことはできませんでしたが、その概要は当センターのホームページ(<http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.html>)で公開しておりますので、ご興味をお持ちの方は是非こちらをご覧ください。緊急調査に参加したセンター員からの原稿の提出が若干遅れたこともあり、今年の編集作業は、昨年よりも2~3週間遅れてしまい、大変申し訳ありませんでした。

さて、活断層研究センターの設立から3年半がたち、当初5ヵ年計画として設定された各研究課題も、最終的な成果の公表に向けたまとめの段階に入ってきました。平成16年度には、同9年度に開始した道東地域の津波堆積物に関する研究の成果を集大成した「津波浸水履歴図(仮称)」の公表を予定しています。本「活断層・古地震研究報告」第3号には、同図の取りまとめの一環として実施した、著しく広い浸水域をもつ17世紀の津波の波源モデルに関する研究結果(数値シミュレーションによる浸水域の比較検討結果)を、津波堆積物に関する2つの論文とともに掲載しました。なお、この論文には、2003年十勝沖地震の波源モデルの比較検討結果が付記されています。

全国の主要98活断層の調査は、平成15年度には一通りの調査を終了する予定で、いよいよ大詰めを迎えています。本第3号には、平成14年度から調査を開始した北海道の黒松内低地断層帯、岐阜・富山県境の牛首断層、長野県の境峠・神谷断層を含めて、7断層、合計9つの調査報告を掲載しました。

平成14年度から重点研究課題に加えられた「活断層データベース」については、最重要の研究課題として、現在、関係者全員で、データの入力にあたっているところです。本号には、データベースの構造とデータ構成の概略を紹介した記事を掲載しました。来年には是非、データベースの全貌について紹介できるよう、データベースの完成を急ぎたいと思います。

活断層や地震断層の基礎的あるいは先端的な研究としては、上町断層帯・生駒断層帯の新しい構造モデル、測地測量結果から推定される鳥取県西部地震に伴う地殻変動、鳥取県西部地震の震源域内・外における断層岩の分布・性状に関する地質構造解析、の3つの論文を掲載しました。また、国際共同研究として、2001年崑崙山中部地震の地震断層とトルコ・北アナトリア断層系の1944年地震断層に関する論文を掲載しました。なお、崑崙山中部地震の論文は、「活断層・古地震研究報告」では初めての英文論文です。

阪神地域の地震被害予測に関する研究については、平成13年度の研究で明らかになった課題の克服に向けて、この1年間、研究担当者が苦闘してきました。その成果を大阪湾を含む大阪堆積盆地の3次元地盤構造モデル、上町・生駒両断層系をモデルとした動的破壊過程のシミュレーション、平均変位速度の分布を利用した上町断層系の不均質震源モデル、の3つの論文としてまとめました。研究が果たしてどの程度進展したか、読者の皆様の忌憚のないご意見を賜りたく存じます。なお、大阪堆積盆地の3次元地盤構造モデルについては、平成15年度内に電子媒体を用いて公表する予定です。多くの皆様にご利用頂ければ幸甚に存じます。

本報告に掲載した22論文については、奥付に記した編集委員会において慎重に査読・編集に当たりましたが、論文の内容に問題があったり、編集上のミスが残っているかもしれません。読者の皆様の忌憚のないご指摘やご意見を賜りたくお願い申し上げます。

平成15年11月21日

編集委員長 杉山雄一